

令和7年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和7年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、2～4学年が目標を上回っているが、5・6年生が目標を下回る結果となった。中学年は「漢字を書くこと」にやや課題が、高学年は思考力・判断力・表現力を問う問題に課題が見られた。説明文の内容を読み取ったり、調べたことをもとに文章を書いたりする活動を日常的に取り入れることや、学習した漢字を普段から活用していく習慣を付けること等、低学年のうちから取り組ませていく。
社会	学校全体（5、6年）の社会の正答率は、全ての学年が目標値を下回っている。知識の定着に課題が見られるため、学習後に復習を十分に行い、知識・技能の定着を図っていく。その上で、資料を読み取り活用する力もつけさせたい。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、1～5学年が目標値を少し上回ったが、6学年は下回った。既習事項の確実な定着を図り、基礎・基本の力を培っていくと共に、基礎・基本を活用して考える問題にも積極的に取り組ませていく。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が目標値と同等か、もしくはそれを下回っている。各学年において、基礎・基本の定着を図りつつ、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。
外国語	外国語の正答率は、目標値よりわずかが下回っている。「アルファベットの書き」に苦手意識をもつ児童が増えている傾向にあるため、英語を書く活動を意識的に取り入れ、慣れ親しめるよう授業の改善を行っていく。

本校の教育目標
◎よく考える子 ○体をきたえる子 ○思いやりのある子 ○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・生きて働く「知識及び技能」の習得 ・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成 ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活（社会性）を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足感を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBＱ－Ｕ調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導（3～6年）による確かな学力の定着	・国語科における、言語活動（話す・聞く）を充実させるための工夫を通し、児童の主体性を育むことを目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観-ブロック会での事後検討を通して- ・組織的で授業に生かせるＯＪＴ（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月1回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（1年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	ひらがなを習得し終えたばかりであるため、「は、へ、を」と「わ、え、お」を混同している児童や、促音や拗音、濁音を使って上手に文を書けない児童、短文を書き終わった際に句点が書けない児童が多い。読むことに対しては、1割程度の児童につまずきが見られる。読み書きを、一層丁寧に指導していく必要がある。	ひらがなについては教科書の音読や教材文や板書を視写することなど繰り返し学習することで習得させていく。また、読書タイムや図書室を利用する時間を活用することで、様々な文章に触れ、正しい言葉の使い方や句点で終わる文の構成が理解できるようにしていく。	宿題の音読については自分でも読んだ内容を聞けるように、児童用端末のアプリ「ロイロノート」を活用して録音したり、読んでいる様子を録画したりして発音や口形などを意識できるようにする。また、考えたことを詳しく書いたり話したりできるようにトークタイムでペアになって伝え合う活動を充実させる。
算数	具体物や図などを用いて数を数えたり、加減の計算をしたりできる児童が多いが、それらがないと計算が難しい児童もいる。また、問題文が読めず、意味が正しく理解できないため、計算の仕方が理解できなかったり、正しく答えが出せなかったりする児童が数名いる。問題文の意味を丁寧に説明し、何を問われているのか、どう計算するのか等の具体的なイメージをもたせていく必要がある。	数量のイメージがもてるまで、必要な児童には具体物としてブロックを操作させながら計算をさせていく。また、その際には5のまとまり、10のまとまり等、計算する上で大事になる数のまとまりをしっかりと作らせる。数の合成、分解についても丁寧に見直しを行う。文章題については、問題文を全体で読み、意味の理解をしてから問題を解くなど自分で問題が解けるように支援する。	支援が必要な児童には、パワーアップ講師と児童の学習の定着状況を共有しながら個別支援を行う。個別で問題を読み、問題を解く鍵となる言葉の指導、立式の仕方を支援する。また、学習した内容が生活の中で活用できるよう、児童の身近にあるものを使って計算したり、遊びの要素を取り入れながら、学びと生活をリンクさせていく。